

美術科の取り組みについて

研究主題 感じ取る力を育てる美術

美術科指導要領では「表現及び鑑賞の幅広い活動を通じて美術の創造活動のよこびを味わい、美術を愛好する心情を育てるとともに感性を豊かにし、美術の基礎的能力を伸ばし、豊かな情操を養う」ことを目標としている。指導目標にある「感性を豊かにし」ということは、感性を育てるためには、感じ取る力を高めていくことが重要である。

私たちは、道に咲いている花など、日常生活の自然の風景を目にしているが、同じものを見ても、そこからさまざまなことを感じ取る人と、そうでない人がいる。その違いはやはり意識して感じ取ろうとしているかどうかだと思う。目には映っているが心に映っていなければ豊かに感じるができない。そのような、ものを見るとき視点や姿勢を育てるために感じ取る力は重要である。美しさは対象物にあるのではなく、美しさを感じている鑑賞者の心の中にある。感性豊かな生徒を育てていくためには美術作品だけでなく、自然も含めて鑑賞を行い、いろいろな視点で豊かに感じ取る体験を積み重ね、心を止めてみることの喜びや楽しさを味わわせていくことが感じ取る力を育てると考えた。

(1) 基礎基本のとらえについて

教科でつきたい力

美術科の目標では生きる力を育てる美術の教科性を①美的、造形的表現・創造としての教科性、②文化・人間理解としての教科性、③心の教育としての教科性の3点をおさえ、生徒の自己表現をはかり、生涯にわたって愛好していく心情と、その資質や基礎的能力を育成することを目標としている。

また、第1学年では特に、表現および鑑賞にかかわる基礎的能力や、理解の確実な定着を図ることを重視し、第2学年及び第3学年では第1学年で身に着けた基礎的能力や理解をさらに深めたり、創造的能力として伸ばし柔軟に応用したりして、創造活動の能力を一層高めるように構成されている。

基礎的能力とは小学校図画工作において学習し身につけた諸能力、水彩絵の具をはじめとするさまざまな色料、材料などの特質についての理解やそれを生かす創造的な技能などを基盤として、中学校段階としての観察力や形を描いたり作ったりする最低限の基礎技能を身につけることである。

すなわち、形、色、材料で自らの思いや意図を表現するのに必要な構図や構成力、形を表す技能、色彩に関する基礎知識や混色、その他によって、色や雰囲気などをつくりだす感覚・技能、材料の性質や用具の使い方など基礎的知識・技術を身につけることを目指している。

美術の学習で表現する活動は、自らより美しく創造的に、そして心豊かに生きる力を培う学習である。したがって、美術の学習活動は個々がそれぞれに自由な表現を楽しむ遊びや趣味の活動ではなく、より豊かな学習経験を積みかさねることで現在の自分だけの体験では得られにくい表現及び鑑賞の基礎となる資質・能力を身につけ、自ら課題を決め、自らその答えをみつけだすべく、取り組む喜びと諸能力、豊かな心や創造性を一層育むことを目指している。

創造的に表現するには何を表現するかという自分の課題(主題や発想)とそれを具体化する(解決していく)方法や基礎的技能などの調和が必要である。基礎的技能を端的に整理すると8つにまとめられる。これらの基礎的技能を総合的に身につけられるようにすることが大切である。

「基礎的能力」

① ものの見方・感じ方を深めること(感じ取る感性・観る力)

- ・ものをよく見取る、力気づき発見する力、よさや美しさ、情感、雰囲気などを感じ取る感性
- ・形・色・量感などの特徴を捉える力

② 主題や発想を創出すること(発想力・イメージする力)

- ・豊かな感情や考え、空想や想像力をひろげイメージする力
- ・自ら課題を解決していく力
- ・新しいものを考え出す発想力・創造的思考
- ③ 考えやイメージをまとめること（構想力、構成力）
 - ・自ら課題解決の方法を考え、組み立てていく力
 - ・創造的構想力・構成力
- ④ 形・色・材料で表す感覚
 - ・形や色、材料・用具等にかかわる基礎的な理解と表現技能
 - ・造形感覚、美的感覚、材料用具に対する感覚と創造的に生かす力
- ⑤ 創意工夫して、よりよく表すこと（まとめ上げる力）
 - ・表現の過程で創意工夫し、総合的によりよくまとめあげる力
- ⑥ 全過程を通して自己確認をすること（自己の確認の態度）
 - ・発想から完成までの表現の全過程を通して自己確認し、よりよい表現のための工夫や新たな課題を発見したり、自分のよさや学習で得たことなどを発見・確認していくこと。
- ⑦ 作品を通してのコミュニケーションや批評をし合い、互いのよさや個性などを理解しあうこと
- ⑧ 自分の作品に愛着を持ち、大切にすること

美術での基礎的技能とは「思うように形が表せる」「思うような色が作れる」「遠近の感じや立体表現ができる」「必要な用具が適切に使える」ようになることなどをいう。中でも特に形を描き、つくる技能や色彩に関する理解と技能は最も基本となる技能であることから、スケッチの指導との関連も図りながら的確な指導を行っていく必要がある。また、誠実に考え表現を工夫しながら追求していくことも欠かせない基本的な態度である。

形の描き方についての基礎は、一律に画一的な方法押し付けることなく自分の思いや対象の観察から形や色の発見を促し、それを描くさまざまなコツを助言することである。たとえば、何も見ずに概念的にコスモスの花を描く。生徒は自分の記憶にだけ頼りコスモスを描く。次にコスモスの生花を見て描く。すると生徒は概念的に描いた花と実際に見て描く花と違いに気づく。花びらの形や花卉、おしべ、めしべまでじっくり観察して特徴を捉えて花を描くことができる。花びらの曲線の美しさなどに気づかせ自然の曲線美を感じ取ることなどを指導することなどはその一例である。

色の表現では、概念的・常識的な色の表現にとらわれることなく、自分の目と心で深く観察し、それぞれの固有の彩りの特徴を捉えたり、感じた色などを素直に表現することが大切である。絵は写真と異なり自分の表したい形や色彩で画面を作っていくところに特質がある。したがって、必ずしも固有色にこだわらず自分の表したい色彩で表してよいことを指導することによって、実際に様々な色を見たりつくったりして色に対する体験を豊かにし、表現への苦手意識を少なくすることができる。また、色の性質や特徴を理解させ、色彩のかもしれない雰囲気や効果など感じ取らせ、混色や重色、ぼかしやにじみなどを体験させながらその美しさに気づかせることも大切である。

また、彫刻などにおいては立体としての追求を深め、何を感じたか何を表現したいのかをみつめさせることが大切である。彫塑では豊かな量感を表現する方法として肉付けの方法を工夫することによって立体感や量感の表現や作品の感じの違いが表れることに気づかせ、自分らしい表現を工夫させることが大切である。

（２） 本年次の研究内容とその方法に関わって

- ① 主体的に問題を解決する力・・・問題に気づき、取り組み、解決方法を見だし、解決する力
 - ・ 感じ取る力（観る力）
 - ・ 発想する、想像する力、構想する力

- ② 自己を表現し、コミュニケーションする力・・・自分の考えを的確にわかりやすく筋道を立てて相手に伝えることができる力（話す・読む・書く）

表現・形や色を思い通りに表すための基礎

・よりよい表現ができるようにする力

コミュニケーション

・作品を通してのコミュニケーション批評力

- ③「学び」を振り返る自己評価の力・・・成就感、達成感を抱き、自分の頑張り、自信につなげる。

・自分の学習状況を的確に判断する

・自分を向上させようとする態度

これらを高めることで自己を表現し、自己実現の形としての作品を制作し、「できた」という喜びから、生涯を通じて美術を愛好していく心を育てることができると思う。どのような気持ちで作品を作り上げたかなど、作品を発表するプレゼンテーションを行い、自他共に作品のよさなどに気づくことができると思う。学びの振り返りでは、自分の作品に愛着を持つ態度、ものを大切にする心を養い、さらなる意欲向上心を育てていきたい。そして、芸術文化の普及、向上に将来、役立ってほしいと思う。

参考文献

中学校美術科学習指導要領（抜粋）

中等教育資料 上村尚徳

美術の授業をどう創るか 鼎談 遠藤友麗 海老名智子 永関和雄

実践例 2年生

① 題材 「日本の美を生かして」 ～伝統工芸 蒔絵～

② 題材について

現在の日本人の多くは、欧米の文化や美術に対して強いあこがれや関心を持つ反面、自国の文化や伝統に対しての関心や理解は少ないといえる。このことは、戦後あまりに欧米化に力を入れすぎてきたため自国文化以上に他国を尊重し、欧米崇拜が強くなってきたためと思われる。日本の美術とはどのようなものがあるか？と質問しても「わからない」や「水墨画」と答える生徒がほとんどである。また、俵屋宗達、狩野派という言葉は社会の歴史で学ぶだけであった。この事実は、従来の日本の教育や私たち教師が日本の良さや自国文化を尊重する姿勢を軽んじてきた結果と考えられる。日本の美術に関しては歴史の授業で文化的な観点から学習したりするケースが多く、概念的な知識理解に偏る傾向がみられる。しかし、美術の授業では固定した知識を概念的に与えるよりも、まず各自がそれぞれの感覚や判断力を働かせて作品が生み出す印象や雰囲気を感じ取ることが重要である。

そうした直接的な鑑賞が前提にあって、はじめて美術史的な知識や造形表現に関わる知識が重要な意味を持つことになる。本題材はこのような実態をふまえ、めざましい変化と変動のみられる国際社会の中で次代を担う生徒たちが我が国の文化と伝統について理解を深めていくことをねらいとしている。

本題材の日本の美を生かしてでは、郷土の工芸である紀州漆器の蒔絵を学習する。海南市黒江は本校の通学区域内であり、数名の生徒が通学している。紀州漆器の歴史は、室町時代紀州木地師によって渋地碗が作られたのが始まりだといわれている。それから今日まで伝統が受け継がれてきたのは、地域の職人だけでなく、その周りの住民の並ならぬ努力と継承力がある。また、県や国が郷土文化の保護に力を注いだことも伝統継承の大きな要因となっている。現在その職人の技は不景気や少子高齢化、都市への人口流出などによって失われつつあり社会問題となっている。このような状況の中、生徒には郷土の文化を知ることやそのよさや美しさを理解すること。地域に愛着や誇りを持たせ、地域の一員として、大切に、創造的に継承していこうとする態度を育てていきたい。

本年時の研究に関わっては、スケッチしたことを元に、イメージをふくらませる。そのデザインを盆という丸い画面でどう活かしていくか（問題解決学習）作品をどのような気持ちで、どのような考えで制作するか。（自己表現）それを互いに伝える鑑賞能力（コミュニケーションする力）作品に愛着を持ち、ものを大切にしようとする心（学びを振り返る自己評価の力）を養っていききたいと考えている。

③ 学習目標（評価規準の設定 基礎・基本）

基礎・基本	学習の目標	・自然や身近なもの、美術作品などのよさや美しさに関心を持ち、創造的・芸術的な表現活動への意欲を高める。
		・感じ取ったことや考えたことをもとに、イメージをまとめる構想力・構成力を養う
		・表現活動を通して美の感動体験をする
美術への関心・意欲・態度	①自ら進んで活動に取り組もうとしている	
	②日本の美や自然の美に関心を持ち、感じたことや自分の考えをまとめようとする	
発想や構想の能力	① スケッチしたことをもとに感性や想像力を働かせてアイデアを考えることができる	
	②完成時の色彩を予想しアイデアスケッチができる	
創造的な技能	①植物をじっくり観察し、形を正確に捉えることができる	
	②形の単純化や強調などを構想し、よりよい表現を求めて取り組むことができる	
	③図案をどこに配置するかバランスを考えてレイアウトできる	
	④漆の技法や蒔絵の技法を理解し、下図に沿って漆を塗り進めることができる	

鑑賞の能力	①地元和歌山の文化と伝統に対する理解と愛情を深める
	②紅白梅図屏風について作者の心情や意図、創造的な良さや美しさを感じ取り理解を深める
	③お互いの作品を鑑賞し合い、良さや美しさなどを感じ取り、よりよい表現の方法を発見・確認することができる。
	④自分の作品に愛着を持ち、ものを大切にしようとする

④ 学習計画 (単元構成表) 全10時間

・日本の美を生かして

学習過程	日本の美を学ぶ	伝統の美を学ぶ1	自然の美しさを見つける	美の構成	伝統の美を学ぶ2	鑑賞
学習の中心	紅白梅図屏風 鑑賞	ビデオ鑑賞	植物スケッチ	アイデアスケッチ レイアウト	蒔絵体験 (本時8・9/10)	作品の鑑賞

⑤ 本時の目標

- うるしのお盆に、図案をどこに配置するかバランスを考え、工夫しながらレイアウトを決める（発想や構想の能力）
- 下絵を転写し、カシュー（合成漆）を丁寧に塗り、蒔絵を体験する。（創造的な技能）
- 蒔絵のよさや美しさを感じ取る。（関心・意欲・態度）

⑥ 本時の展開

学習活動	教師の支援	備考
・前回描いた下図をどこに写すか考える	<ul style="list-style-type: none"> 自分のイメージの再確認をするように指示 参考作品を展示し、いろいろな構図があることを認識させる（イメージ作りの支援） 丸い画面を意識して考えて、（上下がないこと）空間の美があることなどバランスよく配置するように指導する 自分の描いたデザインが生き生きと表現できるように工夫するよう指示をする（机間巡視） 	参考作品の展示
<ul style="list-style-type: none"> 下絵を写す 金の線の1から2ミリ内側をカシュー（合成漆）を塗る。その時どのような色にしたいかアイデアスケッチを提示するなど、講師先生と相談する 金粉をまく（蒔絵） 	<ul style="list-style-type: none"> 用具の扱い方・作業の進め方について指示をする 同じ色のところから先にカシュー（合成漆）を塗るように指示する その時、筆を絞ること、はみ出さないことに注意する 制作の過程で、図案のレイアウトを変更したり工夫したりすることも可能であることを伝え、よりよい表現の方法を探るように促す（机間巡視） 	金粉をまく作業（蒔絵）は専門の先生の指導が入ります
<ul style="list-style-type: none"> 片付け 自己評価 漆について 	<ul style="list-style-type: none"> 本時の制作の振り返りをさせる（ワークシートに記入） 山田健二先生より講話 	

⑦ 結果と考察

本年度の研究では「感じ取る力」の育成に取り組んできた。まず、ものの見方、感じ方を深めることでは、素描の時間を増やし、立体感、量感、質感の出し方を指導してきた。ピーマンやピーナツ、空豆などの素描をし、陰影の付け方を学習した。また、鉛筆による線の表現も練習し、鉛筆1本でもいろいろな表現ができることも学習した。他教科では殆どシャープペンシルを使用するため、鉛筆離れが進行している。美術の時間に鉛筆が必要であることはわかっているが、貸し出しに頼る生徒が多い。シャープペンシルだけでは出せない鉛筆の表現力をいかにのばせるか、今後も取り組む課題であると思う。どのような題材の場合でも素描は不可欠であり、そこにあるものをそのまま描くという基礎的な力が必要である。「みたまま描く」だけではいっように力につかない。そこにあるものの大きさの取り方、明るい・中間・暗い部分の鉛筆の使い方、陰影の付け方など技術の教授がなくてはならない。しかし、中学校美術では専門家を育てるのではない。美術大学の受験のようなデッサンまでとはいかないが、少しのコツを教授することが学習を深めることにつながると考える。素描の発展的な学習として自画像を描いたが、輪郭や顔のバランスはうまくいくが、陰影の付け方＝鉛筆の使い方にはまだまだとまどう生徒が多く、3年間を通じてスキルアップしていかなければならないと感じた。



次に主題や発想を想像することでは、生徒自身の体験や夢などを元に表現する空想画、スケッチなどを元にしてレイアウトを考える完成予想図の制作などが挙げられるが、前者はアイデアの段階からかなり時間がかかった。発想の時点で、テーマを絞る必要があると思う。3年生の実践では「心象風景」を描いたが、どんな世界が広がっているかは生徒の想像に任される。3年間の思い出をテーマにしたり、未来に向かっていく道を描いたり教師側がある程度の設定をしなければ想像もできない生徒が多かった。想像は何かの感動体験や刺激を受けなければできないものである。最近では生徒の感動体験は少なくなってきた。家の人や、自分で展覧会に見に行く生徒は学級でも1、2人であった。美術館に行かなくても美しいものは辺りにたくさんある。何気ない風景の中でも、少し心をとめてみると、花が咲いていたり、鉢に氷が張っていたりなど自然美の発見がある。教科総論でも述べたように、美しさに気づくか気づかないかは美に対する意識があるかないかである。そのようなものを見るとき視点や姿勢を育てるために感じ取る力は重要である。美しさは対象物にあるのではなく、美しさを感じている鑑賞者の心の中にある。教師は生徒にどのような刺激を与えるか、喜びや楽しみを与えられるような教材研究が必要だと感じた。

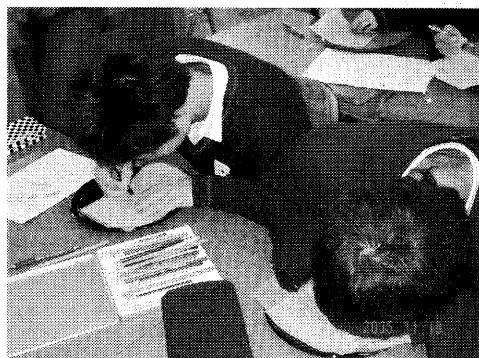


本年度の研究授業では日本の伝統工芸「蒔絵」を学習した。授業のはじめに下絵のレイアウトを日本の浮世絵である葛飾北斎「罌粟」や尾形光琳「八つ橋蒔絵硯箱」など浮世絵や工芸品から構図を学習したが、たくさんの構図がありすぎて、どうしたらよいかわからない生徒もいたので、もっとポイントを絞ったレイアウトの紹介でもよかったと感じている。「空間の美」や「つながり」「ひろがり」など先人が考えた斬新な構図を理解し、まねしてやることによって「美」を感じ取ってほしいと思う。制作した下絵をカーボン紙でお盆に写すと金粉を蒔いて、輪郭をわかるようにし、その線に沿ってカシュー塗

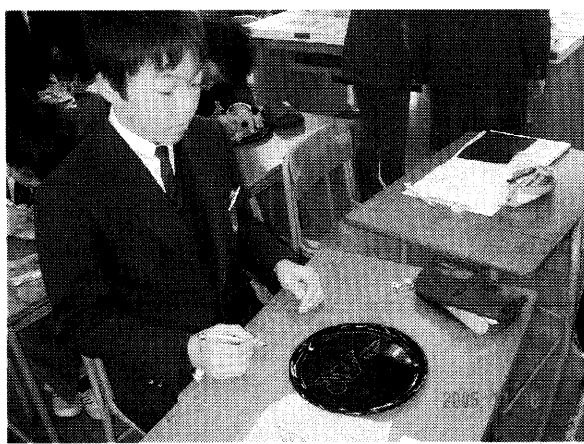
料を塗る。その塗り方には輪郭線を残す方法と残さない方法の2

種類がある。バラの花など花びらが重なっている場合は花びらと花びらの間を1mm残して塗ったほうがよいのだが、どんな場合でも1mm残さなくてはならないと誤って理解している生徒が数名いた。教師の説明がわかりにくく、そこで難しさを感じた生徒が多かった。塗りの初歩段階として重要なポイントなので今後もっとわかりやすい説明が必要だと感じた。カシュー塗料は白に近い色の塗料で接着剤の役目をする。カシューを塗り、そこに金粉を蒔くと一瞬にして金色が付く。その感動を味わわせなかった。授業では「わーきれい」「すごい」などの声も上がり、予期せぬ美しさに

感動した様子であった。生徒たちにはその技術が魔法のように感じられたようで、次はどんな色にしようとして楽しんで取り組んでいた。授業の感想では「もう一度やりたい」「こんな技術が和歌山にあったなんてすごい」など多くあった。美術では「あっ」と思うこと、「すごい」と思う発見や感動が心を動かす力となる。美しいものを美しいと言える素直な感情をこれからも育てていきたい。



また、題材の導入で光琳の紅白梅図を鑑賞したが、鑑賞は生涯教育の観点も含めた社会的要請として、美術と社会の関わりをテーマにした題材も充実させたい。今まで西洋美術に傾向しがちであった鑑賞の学習を改善し、日本の美術の概括的な変遷や日本画・水墨画、伝統工芸の学習を通じて日本の美術や伝統に対する理解と愛情を深め、美術文化の継承と創造への関心を高めることを大切にしたい。



ワークシートより

水流からは主観の反応がなかった。空が考えられる。

図の仕掛け

水流の描きと木の幹の形はどうなっているか？

その木の幹の形をだいたいに描き、ひょっとして、

図上の遊び、黒い線を塗り書きを消す。

いる。波のぐにやぐにやも人それぞれ
ある。感じかたがあるなと思った。

図上のトリックとは？

紅白の2本の木の間に通された一本の

先生が2本をくっつけた
とてびっくりした。

おもしろいな～
書きにしてみよう。

光輝の紅白得図書きを鑑賞して

感想

初めてこの絵を見たとき

川の表現がとてみずみずしい

と感じました。人が感じる

ものをこのゆるやかな線で

表現で表すなんてとてみずみず

だと思いました。光輝は

自分の感じたことを上手に表現

することができると感じました。

くみからは主観の反応がなかった。空が考えられる。

図の仕掛け

くみからは主観の反応がなかった。空が考えられる。

図上の遊び、黒い線を塗り書きを消す。

図上のトリックとは？

白の2本の木の間に通された一本の

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

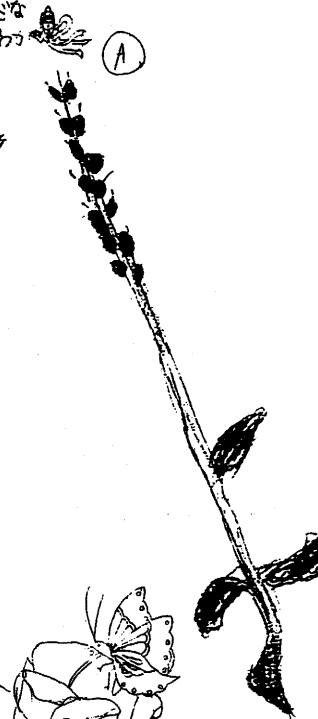
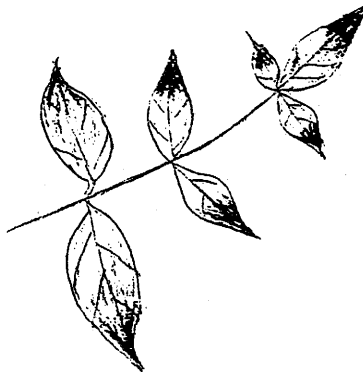
重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く

重なるように描く



生徒作品

